

埋文センターニュース

第6号

1997.10.1

津市埋蔵文化財センター



発掘調査で見つかった池

せんじゅじ 専修寺境内遺跡の発掘調査が終了

昨年10月から実施していた一身田町の専修寺境内遺跡の発掘調査が5月に終了しました。

前回のニュース（第5号）でお知らせしたように、専修寺境内の一角であるこの場所が、かつては庭園の一部として絵図に描かれていたことがすでにわかっていました。

発掘区域を南北に分割して調査した結果、北側で池の遺構と環濠から池に水を取り入れる導水施設が見つかりました。表紙の写真は、池の全景を写したものです。導水施設は、寺域の周囲を巡る土塁をほぼ直交するように掘削し、その底に松の木をくり貫いた木樋を縦列して据えています。環濠側には取水口として両側に石が据えられているのが下の写真からも確認できます。また、木樋はわずかながら池側に緩く傾斜しています。これらから、この施設が排水を考慮しない取水専用のもので、常時導水するものではなく、必要に応じて取水する機能をもっていたと考えられます。



環濠から水を取り入れた木樋

寺域の区画と保安を意図して築かれた土塁を切ってつくられているため、木樋を敷いた後には再び土塁を修復し、導水部は暗渠となっていたと考えられます。

出土した遺物には、多量の瓦のほかに土師器や陶磁器が見つかりました。これらは18世紀代以降のものがほとんどです。その中で注目されるのは、下の写真の瓦塔の屋根と基壇の一部でしょう。屋根部分は全く瓦質化しておらず、あたかも古代の瓦塔を思わせ、基壇部分は場所によって焼成の度合いが大きく異なっています。屋根部分の表現（丸瓦の釘隠し）や文様（瓦当の菊花スタンプ文）、そして他の出土遺物から判断して、これらは近世の遺物と考えることができ、境内地での出土は専修寺との関連が注目されます。

今回は、境内の一角を調査しただけですが、庭園の起源や変遷を考える上でも貴重な成果があったと言えるでしょう。（中村）



瓦塔（上：屋根、下：基壇）

埋文センター見学感想から

風薫る5月の2日。片田小学校の6年生97名が春の遠足で埋蔵文化財センターを見学しました。毎年、この季節の埋文センターの見学は6年生の遠足コースとして恒例となった

感があります。今年は、片田小学校の皆さんが見学の感想を寄せてくれました。ここでその一部を紹介したいと思います。

「発掘調査のビデオを見て、ぼくはおどろいた。津市内にはものすごくたくさんの古墳があったなんて知らなかったからだ。ビデオにはその他、埋蔵文化財センターがやっている仕事についてを見た。ぼくはすごいことをやっているんだなあと感じた。坂本山古墳はぼくも知っていたが、発掘しているところが本当に身近だったのでびっくりした。発掘している場面を見てすごいなあと思った。なぜなら元の形がわからないのにどうしてわかったのか不思議に思ったからだ。」

(片渕雄司)

「整理室では、本物の土器をさわらせてもらいました。おまけに、土器をつなげる作業までさせてもらいました。私はまさか、本物の土器をさわらせてもらえるとは思ってもみませんでした。1,500年前の土器はざらざらしていて、厚みがありました。何か、もようがついている物もあって感心してしまいました。昔の人がこういう物を作っていなければ、私たちは、今のようないし器を使っていなかったのかなあ、と思うと、昔の人にとっても感謝してしまいます。ひとつ気が付いたことがあります。それは何かというと1500年前の土器と700年前の土器とでは手ざわりがちがうのです。似ているんだけど、少しちがいました。色もちがいました。1500年前と700年前では土や温度がちがったんだろうなあ。つなげる作業はとてもむずかしくて経験がないとできないことだと思いました。」

(藤井文香)

「展示室には、高茶屋の銅たく、坂本山古墳、高井古墳でみつかった土器、はにわのほか、矢じりなどもあったけど、本でみたことのない古墳の種類も模型でよくわかってよかった。本物を見せてもらってうれしかった。」

歴史をみんなで守り、その見つけた物を埋蔵文化財センターの人の手などで、とってもこまかく、まめに残して、展示するなどでよく歴史のことがわかり、ずっとその歴史が続くのかなと思った。歴史のことがよくわかって、もっと歴史に興味が出た。そんないい体験ができてとってもよかった。とってもおもしろかった。」

(曾我将史)



遺物を手にとってみよう



しっかりと遺物の観察をする

土器残留脂質の組成変化と遺構・遺物の性格認定について

—— 日本文化財科学会第14回大会参加報告 ——

1. はじめに

発掘調査で検出・出土した遺構・遺物の性格・用途を検討するにあたっては、今日各種の自然科学的な分析法が活用されている。このうち土器・石器の使用目的や土坑等の性格認定、及び墓坑の認定資料の収集等を目的として、脂質の分析が行なわれていることは周知の通りである。

今回の大会においても脂質の分析に関する研究発表が行なわれたが、その内容はこれまで知られてきたものとは異なり、考古学研究における脂質分析の有効性にある種の疑問を提起する内容を含んでいると思われるため、ここにその要旨と私見を報告し、諸賢の御批判を仰ぎたい。

2. 研究発表の要旨

研究を行なったのは国際基督教大学教養学部理学科で、内容は以下の様なものである。研究の目的は、土器に吸着された脂質の組成が環境の変化と時間の経過によってどのように変化するかを実験的に明らかにすることである。実験にあたっては、粘土を焼成して土器モデルを作成し、これに動物性脂質としてクマ及びイノシシの脂質、植物性脂質としてツバキ油を吸着させて、3種の条件下で一定期間経過したのちの脂質の変化を定量化している。動物性脂質と植物性脂質はそれぞれ個別のグループによって分析されており、研究発表も個別に行なわれているが、ここでは2つの発表内容を合わせて考えてみたい。実験における3種の条件とは、①土壤中、②空气中、③空気を遮断した封管中である。

実験の結果、動物性脂質については土壤中の試料の脂質が最も急激に減少するが、100日目以後はほぼ一定の値を示すようになる結

果が得られた。また、主成分の組成比率についても変化するという結果が得られている。

植物性脂質については、脂質の減少速度は土壤中の試料が最も速いが、組成変化は空气中の試料に顕著に認められた。

このほか、植物性脂質については土器表面と内部における脂質の組成変化の比較も行なわれており、土器内部の方が土器表面に近い部分よりも脂質の組成変化が少ないという結果が得られた。

3. 考察

上記の研究結果を基に、脂質の分析結果を参考にして遺構・遺物の性格・用途を考察する場合の問題点を整理してみたい。

第1に脂質の組成が変化するという点について。これまでの脂質の分析に基づく動物種の推定は、脂質の組成が環境の変化や時間の経過にかかわらず保持されることが前提となっている。しかしながら、上記の実験結果によれば脂質の組成は変化するのであり、もしある種の脂質の変化後の組成が他の種の組成と類似するものであった場合その識別は可能であるのか、ということが問題となる。

第2に試料の保存条件の違いによって同種の脂質の残留量と組成に差異が生じることである。同種の脂質が吸着された遺物も土壤中と空气中では脂質の変化の速度・程度が異なるために、遺跡における遺物の保存状況や遺構の土壌環境の違いによって、同種の脂質を異種の脂質と誤認する可能性がないか、という問題である。

4. おわりに

考古学研究における自然科学的研究法の重要性については今更繰り返す必要はないと思うが、その援用の方法や解釈のあり方につい

ては、考古学研究者のあいだにまだ十分な素地が形成されてはいない様にも思われるのである。

また、筆者が日本文化財科学会の研究発表会場に足を運び始めて数年になるが、各研究内容と考古学研究の関係をすぐには思い描けないことが多々ある。ひとえに筆者の自然科学的素養の不足によるものであり、本稿の内容についても発表者に直接確認をとれていな

いため、誤解があればすべて筆者の責任である。

ただ、それにしても自然科学研究者と考古学研究者が自然科学分析の方法や結果の解釈について、定期的に公開の場で議論して、その時点における問題点を整理していただけたら、素養なき身としては大変ありがたいと思うのである。

(山口)

〈文献〉

堀内晶子、武石奈津枝／国際基督教大学教養学部理学科 「土器に吸着された脂質の基礎的研究

(4) —環境と時間による動物性脂質の変化— 『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会 1997

堀内晶子、給田茂哉 「土器に吸着された脂質の基礎的研究 (5) —土器モデルに吸着された脂質の挙動— 『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会 1997

図2 土壤中に保存されたクマの脂質の回収量の変化

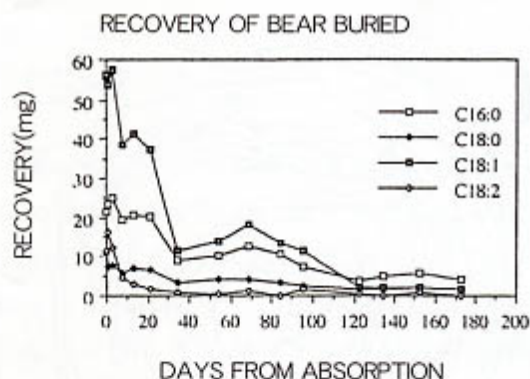


図3 土壤中に保存されたクマの脂質の組成変化

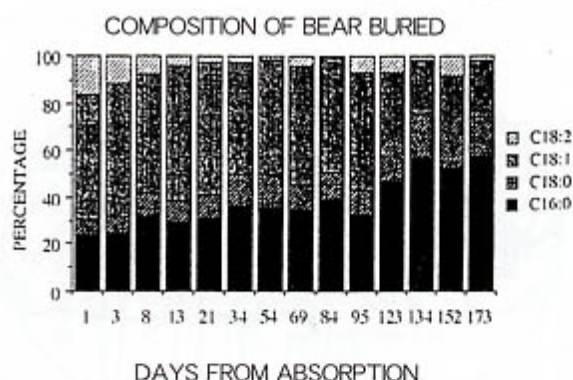


図2・土壤中に埋められたツバキの脂質の回収率と組成変化

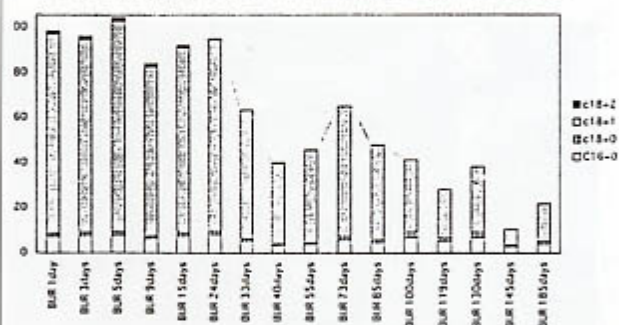
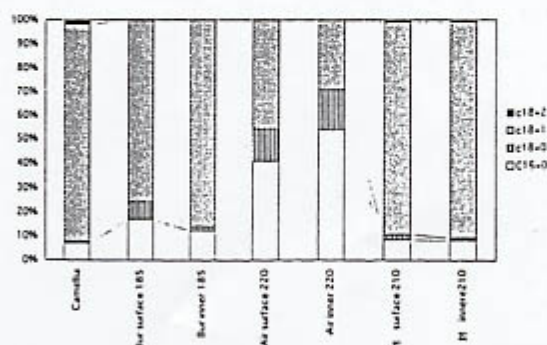


図4 土器表面近くのツバキの脂質 (surface)組成と土器内部に浸透した脂質 (inner)組成



※図は〈文献〉より転載

遺跡紹介⑤

津市指定史跡 池の谷古墳

池の谷古墳は、津の市街地の南に広がる垂水丘陵の東端にあります。丘陵の頂部に築かれた古墳からは、広く伊勢湾や知多半島を一望することができます。

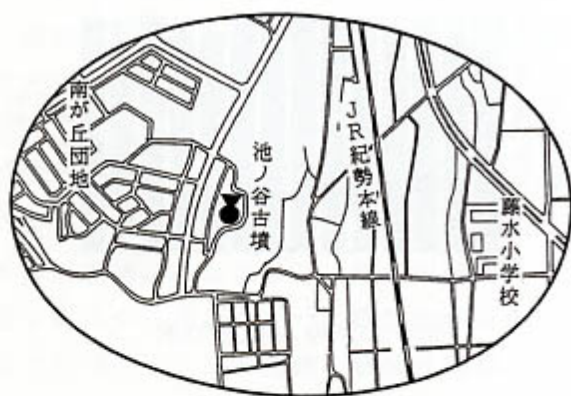
この古墳は、団地造成の際に発見されたもので、全長90m弱、前方部幅28m、後円部径50mの前方後円墳です。二段築成の古墳で、前方部の形は先が広がらずに長方形に近い形をしています。中世に古墳を利用して砦が築かれたうえに、団地造成の際に前方部の一部が削平されているため、現在の姿は古墳が造られた頃とはかなり違っているようです。古墳の表面などから円筒埴輪が採集されており、5世紀前半頃に築かれたものと考えられています。

池の谷古墳が出現する前の津市周辺の古墳の状況は、あまりよくわかっていません。弥

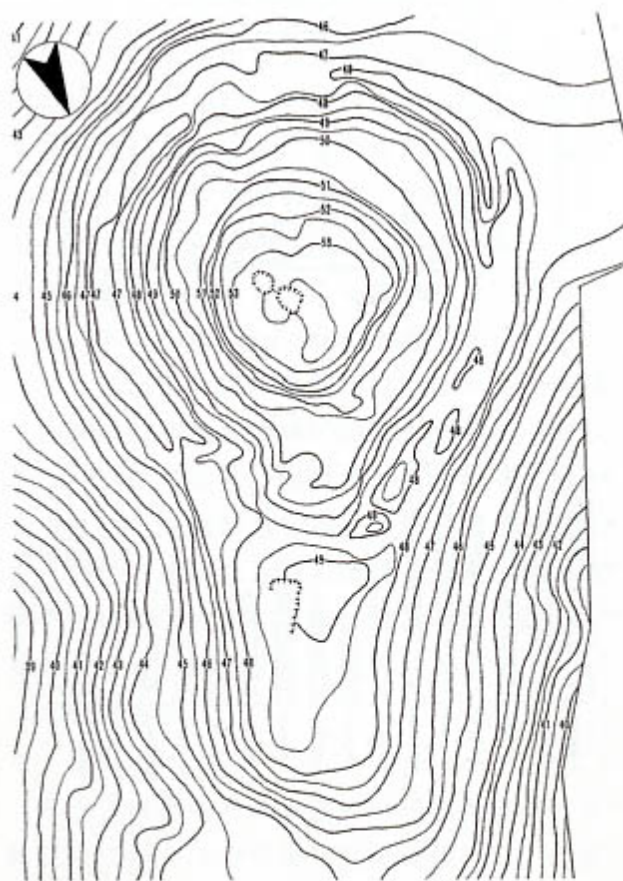
生時代の墳丘基と同じような規模・内容の坂本山古墳群の存在が知られているだけで、大規模な前方後円墳や前方後方墳が築かれる鈴鹿川流域や雲出川流域とは大きな隔たりがあったようです。池の谷古墳は、このような状況のなかで突如として出現します。津市内では最大、伊勢湾西岸でも最大級の規模を誇るもので、ほぼ同じ頃に出現した安濃町の明合古墳とともにこの地域の盟主墳と考えられています。

『日本書紀』の雄略天皇17年の条には、土師連吾筈が伊勢国藤形村その他5国の私民部を朝廷に献じて、その民部が贄土師部と名づけられたという記録があります。藤形村は池の谷古墳の近くの津市藤方ではないかといわれており、この記事と古墳の関係が注目されています。

(村木)



現在の池の谷古墳の様子（東から）



池の谷古墳測量図 (1:900)

遺物紹介⑤ 津市出土の古代瓦

津市では、主として安濃川と志登茂川の流域で古代の瓦が見つっています。

古代瓦というのは、飛鳥・白鳳・奈良・平安の各時代の瓦のことで、後の時代の瓦よりも大きく、葺き方も本瓦葺きのみでした（現在一般的な^{さんがわら}棧瓦葺きは、近世以降のもの）。

瓦は型を使って大量生産していたので、瓦^が当（軒先の瓦の文様のある部分）の文様の種類や特徴から、時代や系統がわかります。軒丸瓦の文様には、^{れんげもん}蓮華文、^{じゅうけんもん}重圈文、^{ともえもん}巴文などがあり、軒平瓦の文様には、^{からくさもん}唐草文、^{じゅうこもん}重弧文などがありますが、各々がさらに細かく分類されています。

瓦のルーツは朝鮮半島の^{くだら}百濟・^{しらぎ}新羅・^{こうく}高句麗、中国などの国々に求められますが、古墳に代わる権力の象徴という意味をもった日本の仏教寺院史は、当時の政治史でもあり、瓦はその重要な研究資料とも言えます。

津市で古代瓦が見つかった場所は、伝承等も含めると図の様に10箇所以上あり、古代寺院などの瓦葺きの建物が何箇所かに存在していたと考えられます。

このうち、現時点で所在地が特定されている古代寺院は四天王寺（広明町）ですが、その隣接地では瓦を焼いた窯の跡が見つっており、この窯で焼かれた瓦が四天王寺で使われたと考えられています（写真左）。

また、この窯跡で見つかった瓦と同型（同じ種類の文様）の瓦が大里窪田町でも見つかり、四天王寺瓦窯で焼かれた瓦が運ばれてきたと考えられます。

このほか、洪見町でも古代瓦の破片が採集されており、「洪見廃寺」の存在が想定されていましたが、洪見砦跡の発掘調査においても数10点の瓦片が出土し、可能性はさらに高まりました（写真右）。他の場所も含め、今後の調査・研究が期待されます。（山口）



古代瓦の発見地点



四天王寺出土と伝えられる瓦



洪見廃寺(?) 採集瓦(1・3・4・5)と洪見砦跡出土瓦(2・6)

センター日誌抄

平成9年

1月27日 《調査》黒木遺跡ほか試掘開始
 2月19日 《会議》全国公立埋文協北陸・中部
 ～20日 ブロック会議に出席
 4月8日 《見学》県埋文センター 11名
 4月17日 《資料貸出》育生小学校へ長遺跡出土遺
 物などを貸出
 4月25日 《会議》県埋文担当者会議に出席
 5月2日 《見学》片田小学校遠足 97名
 《調査》専修寺境内遺跡の調査終了
 5月7日 《調査》桜橋地内で試掘
 5月12日 《調査》一身田慈智院の試掘開始
 《調査》桜橋地内で試掘
 5月14日 《視察》鈴鹿市教育委員会 2名
 6月4日 《見学》県埋文センター 4名
 6月5日 《会議》全国公立埋文協総会に出席
 ～6日

6月12日 《見学》育生小学校「家庭教育学級」
 22名

7月2日 《見学》橋南公民館 31名
 7月8日 《会議》埋文パトロール委員会開催
 7月9日 《見学》橋南公民館 25名
 7月10日 《見学》津工業高校教員 2名
 7月11日 《会議》県埋文担当者会議に出席
 《視察》文化庁 1名
 県埋文センター 2名
 7月15日 《資料貸出》河芸町へ山王遺跡出土遺物
 を貸出
 7月16日 《見学》上浜町1丁目老人会 25名
 8月11日 《見学》県立高校工業部会土木教育
 研究会 17名
 9月8日 《調査》石切山遺跡発掘調査開始
 9月19日 《調査》宮ノ前遺跡発掘調査開始
 9月20日 《調査》津城跡試掘調査開始

『埋文センター年報1』の刊行

平成6年11月に開設された本センターでは、昨年度末に平成6年と7年の2ヵ年の業務をまとめた年報を刊行しました。巻末には、今まで市内で行なわれた全調査の年表と、刊行から10年近くなって現状とのギャップが大きくなった『津市遺跡地図』の改訂資料を掲載しています。年報では今後も、業務内容の報告に加え、現状の成果をふまえた遺跡地図の改訂を逐次行なっていく予定です。



《編集後記》 今年の上半期は本調査が少なく、職員それぞれ、調査済みの遺跡の報告書作成に関わる時間が多くとれました。下半期には本調査の予定があり、秋から冬へと季節が進むにつれて調査も本格的になって、その成果に期待がもたれます。次号では、調査の詳しい様子をお伝えできるものと思います。 〈中〉

発行日：1997.10.1
 編集・発行：津市埋蔵文化財センター
 〒514 津市安東町1225
 TEL 059-229-0210
 FAX 059-229-4601
 印刷：森田印刷株式会社